

伊香保志

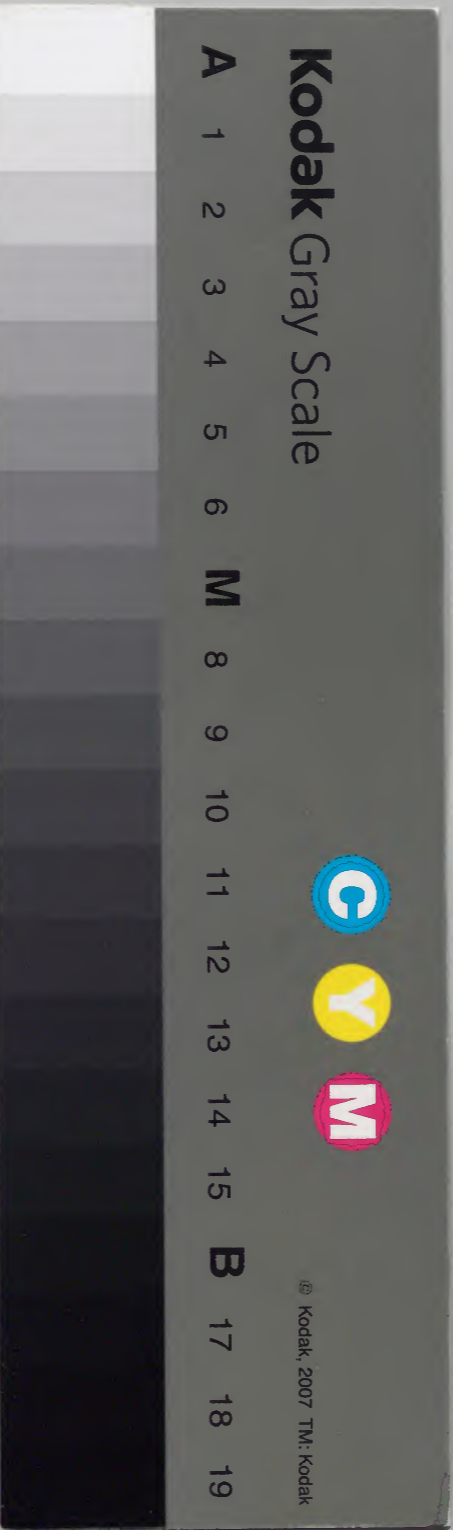
卷三



地

| | |
|--------|---|
| 内閣文庫 | 和 |
| 三六四七二號 | |
| 三冊 | |
| 一七四函 | |
| 二架 | |

| | |
|------|---------|
| 内閣文庫 | |
| 番號 | 和 36472 |
| 冊數 | 3 (3) |
| 函號 | 174 235 |



100

伊香保志下巻目録

○舊事

村民八氏の事

木暮氏古文書

○附録諸書抄出

萬葉伊加保歌并解

北國紀行

東路の裏

伊香保のゆかり

赤城紀行

伊加保の古歌

宗祇終焉記

山吹日記

伊香保道の記

登榛名山記

伊香保志下巻目録

遊船尾伊香保記

更衣日記

仁泉亭記

下ノ目單

伊香保志下卷

東都 秋萍居士 輯

舊事

土人傳へ云人皇十一代垂仁天皇二年伊香保山温泉涌出は然き
 ども上古の事をも固くをたぐらざる伊加保の地名の書を見たるを
 かの萬葉集を始めと夫より古今集以下代の歌集に伊加保嶺伊加
 保の沼と詠み又延喜式國史に伊賀保の神と擧げあり當地をかく
 古くより伊香保と稱し群馬郡に屬し嘗て合村分郷世と云
 他より地中世を桃井の郷伊香保の北の嶺といふと
 廣くはしるや又そのうみを伊香保の神の神領ありし足利氏の世

伊香保志

天香樓藏

上杉氏山の内 當國の守護にして平井城に居て鎌倉の管領と
 為りその長臣長尾氏と守護代をして白井城に居しむその頃この
 地の地を長尾氏に屬し天正年中 後小田原の北條氏に屬し天正
 十八年徳川氏關東に移り後井伊氏初箕輪を城し後 の領とす寛
 永九年より徳川家直領となす當國岩鼻代官所の支配とす承
 應三年改めて檢地あり村高二百四十石餘に定むれ悉く公租申
 付後元祿五年より十四戸の 又伊香保の沼を元來當村に屬し沼
 の西ある天神峠を村界とせしり寛文六年治と小富士との地を就
 地界の公事起り榛名山別當より官へ出願せ趣りしをその頃官よ
 り沼を榛名の神の御手洗池と命じしり沼の地を榛名山に屬せり

こゝをさあね近とを慶應二年より岩鼻より代官を郡代に改め
 られ明治元年六月より岩鼻縣の管轄とす同年十一月より前橋
 藩より移り明治四年十月より群馬縣となす六年六月廢縣して
 熊谷縣に移り九年八月より群馬縣の管轄となす
 この温泉垂仁帝の世に開けたりといひ傳へまざるの浴場と後
 け人の來り浴みたるごとくを浴を何所の浴よりありん知らざる萬
 葉以下代の歌集より伊香保の名を見ゆれど湯の事を見えぬ此の
 湯の事を書に出でたる初めを北國紀行より文明十八年足利將軍義満
 惠法印一七日此湯に浴せし事見え又宗祇終焉記より文龜二年政義尚の世
 將軍義連歌師宗祇此湯中風の病によりて入居て見えたりと

二書の大流 その流を風と湯治する地をたゞを久しきいとも知られ
 たり抄出す たゞ又その頃人家を今の湯元の地へ移居せし天正四年に今の地へ
 移居するも言傳ふ 末の仁泉亭記に 近き世をふめてを此湯の奇効
 ありと愈せり 顯るれを本皇浴する人年々多し韻人学士の紀行
 ありと多し 其二三と摘録しを 殊に近年泉質の分析ありて希代乃
 名湯あると高くせり 知られを縉紳貴顕の人此を遊び且を病
 せ養ひ且を暑を避ると年々追ひ盛なり 特に明治十二年泰老
 之も 皇太后宮此温泉へ行啓せらるる七月十七日東京に立たせ
 給ひ御道筋中仙道より湯川を歴て廿日午當所へ着御りり木
 暮八郎の家を假の御旅館と定めらる供奉の女官に典侍萬里小路幸子

下ノ二

掌侍錦織隆子 命婦以て皇太后皇太夫萬
 里小路博房 宮内大書記官香川敬三三 等侍醫竹内正信 其外近衛尉官
 宮内判任官等以下凡供奉の者百餘人あり 廿三日向山へ遊歩せさせら
 る八月二日此を出立せたるひ湯川より前橋を過ぎて東系へ還御を
 せ 此の温泉の申も畏き面目を尚千百年行くと念盡
 まね榮ありん 御逗留の中より落雷ありしを未系より避雷柱を取寄せ
 後よりいげたる伊香保の道ゆきふらにも落雷あり 記せりされど常に落雷少しと土人をソん

村民八氏の事

當村民の古より住居する者と木暮岸島田 以上三氏を各 大島千明
 永井後閑福田の八氏 以上本末合せを十四戸けり土人これと大屋と辨

あり此の書と徳川氏の始り白井長尾氏の子孫の他國より遷り考案
國の有川某子その祖先の舊跡古傳と質問せしむ答にその見ゆその
文頗長し今伊香保の事に係る所の抄出さるる左の如し長尾
氏の遺臣あると證せし

上略 御先祖之被召仕候者之子孫今當國ニ居合候分之名
付名跡次候者壹人宛書付進上申候 中略 伊香保屋鋪者
十二間乗手之名付木暮下總子金太夫同八左衛門岸
弾正孫六左衛門岸圖書跡無之大島勘解由子甚石衛
門木暮新八跡無之千木良出羽孫三郎左衛門此分皆
御譜代相傳之者共白井城廻在郷羅在候今度我等方へ

被遣候御判為見申候處彼者共再三頂戴難有由申候

下略 木暮新八跡無しと云れど今の

木暮武録を新八が跡あり

上毛志料 此温泉取立たるを輝景 白井の長 旗下木暮下總守

尾氏あり

岸筑前守外都合十二人ありや、り然まども八氏の内最古き若

ちまら

そ千明氏と見ゆ千明古を千木良をも書く湯元の地を古く千明

氏の所有に、往時を、家居し文龜の頃連歌師宗祇

千明氏

千明氏子宿室仁泉亭を名づけしを、即湯元の地

の事

ありや、今湯元に千明元屋敷の稱あり湯の事に付

そ千明氏の由緒最重し 現に温泉涌口八處の半を千明氏の有し

て寛の堂造るを千明氏最権あり

仁泉亭の記を據きを千百年前より僅かにある村民湯元の

地を任み其地も村民も共々皆千明氏の屬ありに後元龜天皇の頃當郡武田氏を屬せし時千明氏の嗣子幼くして母老し餘民相謀りて有司を告げ村を今の地に移し温泉の業を営む土人今も傳へて天正四年武田侯地を七民に分ち賜ふなり其の時其事を七民を千明岸、木暮、大島、後閑、望月、今永井氏、島田之再分れり十四戸あり各其の温泉を引く官又其の法を定め千明氏に世と算の事せしむるの地その所有なきを云とせしめ、仁泉亭記、然も其の流次の木暮氏の傳ふ所と異あり併せ見えし次岸氏の祖先を往昔伊香保神社の神主ありしをいひその祖某の墓今も神社の側にあり又天正の頃岸

筑前介安兼の里に醫王寺を創基す、業がらり古とて千明氏温泉の地を有し岸氏神社を守世のちあらしを永祿中武田氏當國を役へしうち西武田を屬し天正中に至りて餘の五氏外よりあきて共々此の地を賜ふ武田滅びて後七民共に長尾氏を従ひ、大島氏を新田郡大島村より新田氏の支商ありしをいひ、安永年中高山彦九郎が大島氏を訪ひて系圖調べし事あり下赤城紀行に、島田権右衛門の家を後分ち福田氏も後興むる家見えし、或云く此も島田平、當村往年より屢火災ありて各家皆あらしをいひ、その舊記を失ひて文書の徴をばし、但木暮八郎の家を僅に遺の古文書系圖等と存せり據りて其輯めを左に記す、木暮氏を、村上源氏より赤松、その祖を下総守祐利と云代に伊香保村に住居し、此の地を領せ祐利天文年中當國平井の上杉氏より

八郎別家^{ハチロウ}と武大夫^{タケノオ}を改稱^{カクシヨウ}し今^{イマ}武^{タケ}此^{コノ}の三^{サン}家^ケ代^トその名^ナを継^{ツグ}ぎ今^{イマ}至^{マデ}その寛永^{カンエイ}九年^{クニヌ}當^{タテマツ}村^{ムラ}代^ト官^{クニノミヤ}文^ノ記^キとある^{アル}れし^{レシ}よ今^{イマ}以来^{イザレ}を百^{ヒャク}姓^{セイ}並^{ナヒ}の姿^{サマ}や多^{オホク}ゆ^クを歎^{ナガメ}き直^{ナホ}信^{ノブ}の五^{イチノ}直^{チキ}盛^{シゲ}る寶^{タカラ}永^{トヨ}三^{サン}年^{ネン}先^{サキ}規^{ノリ}のめ^メと地^チ士^シと多^{オホク}あり騎^{ウマ}馬^バ足^{タラシ}輕^カの軍^{イクサ}役^{ヤク}を勤^{ツト}めん^トと出^{イダシ}願^{ガハシ}世^ヨ奉^{ホウ}あり^リその後^{ノチ}延^{ノビ}享^{キヤウ}三^{サン}年^{ネン}當^{タテマツ}村^{ムラ}關^{セキ}所^ノ當^{タテマツ}番^{バン}二^ニ人^ニの考^{カウ}を帶^{オビ}刀^{タガ}を^ヲまき^{マキ}て^テ定^{サダメ}め^メれ^レしに依^{ヨリ}て寶^{タカラ}曆^{リキ}五^{イチノ}年^{ネン}同^{ドウ}八年^{ハチノ}兩^{リウ}度^ト再^{マタ}先^{サキ}規^{ノリ}のめ^メと出^{イダシ}願^{ガハシ}せ^セし^シが^ガ免^{マク}許^{キョ}無^クし先^{サキ}祖^ソ存^{ゾン}真^{マコト}入^ニ道^{ミチ}隱^{カク}居^イの^ノ時^{トキ}自^{ミヅカ}携^カへ^テた^タる^ルを^ヲ見^ミえ^ス古^コ文^{ブン}書^{ショ}數^{スウ}十^{ジュウ}通^{トウ}今^{イマ}皆^{ナラ}八^{ハチ}郎^{ロウ}が^ガ家^ケに^ニ傳^{ツク}へ^テたり^リ今^{イマ}その^ノ内^{ウチ}を^ヲ摹^モ寫^シし^シを^ヲ掲^{カケ}ぐ^クの^ノ外^{ソト}木^キ暮^ク氏^シ一^{イツ}族^{ソク}に^ニ尚^{ナカ}文^{ブン}書^{ショ}刀^{タガ}劍^{ケン}の^ノ類^{ルイ}許^{キョ}多^{オホク}傳^{ツク}へ^テたり^リしが^ガ代^トの^ノ數^{スウ}度^トの^ノ火^ヒ災^{サイ}に^ニ失^{ウシ}せ^テ今^{イマ}を^ヲ傳^{ツク}へ^テら^レば

木暮祐利入道スル時
武田勝頼ヨリ與ヘラレ
シ法名ナリ朱印奇卓
リ勝頼ノ印ト見エタリ
原書ハ大奉書紙横ニ
折中央ニ此名ヲ書キ未
二年月ヲ書ス大サスヘ
テ圖ノ如シ今縮メ寫ス



存真

壬辰年

卯辰年

縮寫二分之一

定

- 一湯坪 并持高之事
- 一火漣之事
- 一酒運之事
- 一入沢口 拾葉文
- 一河之津村 秋葉文

石州白井城主長尾輝景後二入道

天正十年

了了七号輝景

事書上卷

上州白井城主長尾輝景後二入道
 之威玄下云入澤口ハ澁川村ノ内ノ
 字ナリ阿久津村ハ澁川ノ東北ニリ
 天正十年八壬午ナリ

縮寫三分之一

定

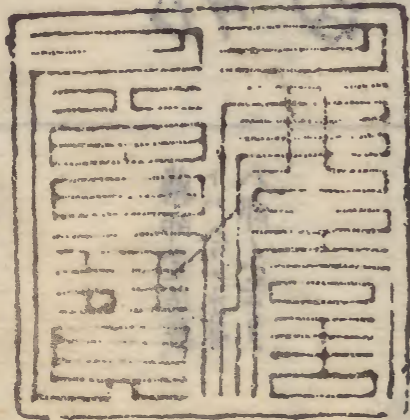
- 一 博考^{ハクキ}六官^{フクビキ}之^ノ事務^{シヨウ}
 - 一 兵^{ヘイ}之^ノ事務^{シヨウ}
 - 一 國貨^{クニカ}之^ノ事務^{シヨウ}
- 右三ヶ条^{ミナ}並^ニ之^ノ修^{シユ}定^{テイ}也^{ナリ}
- の^ノ件^{ケン}

天正十三年
二月十八日

本堂^{ホンドウ}印^{イン}

此文書何處ヨリ出デタルヤ知ルベカラズ

印 佛法僧寶



定

藥師堂屋敷
波儀之山房政白
水蓮の并 瀧之波
相傳 瀧之谷之鉄
炬一挺之走廻原

縮寫
三分之二

藥師堂屋敷
十八合ノ木暮
八郎ノ宅ナリ



可謂之者也似此付

天正六年

十一月廿種魚

種魚

本意存心

縮寫二分之一

後目言書成由一極折見所要山依主
 款月之書級意外以強中一上為倫方
 後分白家康書語王度中以為進者
 皇之境今起心以物又稱猶一合到其
 在位公於併和伯着中以此之始之
 道台現來之乃鯨合年々

二月廿日
 本堂下總司人

一合八一匣ナリ天正十年瀧川益前橋ヲ去ル
 後小田原ヨリ併和伊豫守倉賀野ニ來リ居リ
 上ノ事ヲ執行ストアリ併和伯者其一族カ

本堂下總司人



縮寫二分之一

知りて事

右主部

合式百石 大尾子松

右主部政ら病臥地内

丑歲略慶長六年辛丑

水端の面と物と

慶長六年九月十日

井伊直政慶長六年二月上州高崎ヨリ近江佐和山へ移封セラル同七年直政卒シ長子直繼後嗣ト同年春佐和山ヨリ彦根ニ移リ同十九年十二月弟直孝ニ家ヲ讓ル木暮藤木即ノ事ハ本文ニ委シ

本意者そ

縮寫二分之一

作和山江紙

より

慶長六年 本意者そ

本意者そ

岡本半介井伊家三名高幸家老ノ家ナリ

木暮氏略系

源祐利 木暮下總守
八道存真

天正十八年八月朔日歿

祐行 木暮下總守
實惣社勝山城主關口若狹守次男
室祐利長女

某 木暮弥次郎廿五歲歿

直信 木暮藤太郎後金太夫
仕井伊家後歸繼家

直盛 木暮金太夫

直定 木暮金太夫
寶永

祐直 木暮藤次郎後八左衛門
承祖父祐利隱居別家之
後

正保五年二月八日歿

則藤 木暮又左衛門

某 木暮新八郎後武太夫
為叔父直信猶子別家

則重 木暮八左衛門
延寶七年十月八日歿

某 木暮武太夫

○附録諸書抄出

萬葉集伊加保歌并解

萬葉集十四の卷上野歌の内伊加保の歌九首あり今左に列す
萬葉考并予橋本直香の萬葉上野歌解よりその大意を解
く末子伊波保呂安藏
山子持山の歌を附す

伊加保の雨雲以傍をかぬまづて人ぞおろし
るを祠のりそつと助辭あり以て發語ありかぬまづとの解に
或云かを發語よを沼馴との義を或云加沼やりの地ありとを
其地知られず或云束の間の物たる歎とをわらわらとを
いとく言ひ騷を義ありの兒等の女せり
大意を伊香保の雨雲の連續を羣を發つめく汝を故のり

予人言い驛かううを今を否まをいざや諸やもす寐しあ
と妹等とくわをなす

伊加保ろの岨の榛尔然り奥吹勿く糸を眼前し空のな

岨と山の峙てる處あり榛い字の如く今のえんのまあり古来萩

ありといふ統いれを余を取らば説長けま略す

大意を伊香保の岨の榛乃糸生ひ茂りたりかくくをく

奥深く物どかゆを思ふと勿き眼の何よりだす耳く何くは末

を末のよとそそいふ今先達せんやをなす

伊加保ろのやきりの樋ろ霞の虹の頭ろまも指寐を指寐ぞぞ

やとろと八尺ろをい深き心もいひ或を彌坂ろを坂多とややも

いひ或き湯坂の轆ろを今の伊香保温泉の地をまはるもいひ堰を

田の水を湛へたぐを委せい今水澤村の井出野その舊地をあらと或

を井出村をまもいふ共中巻り或を伊香保の沿水の落つる處

を井手又やまのやりくも云此統疑はし或を萩原村利根川のすし

町并あり各水りり坂りり井りり各敷八のりりもいひぬと

にどの訛頭ろまを頭ろまをの訛あり指寐を男女互手て

指し交へて寐る事なす

大意を伊加保の堰より霞ち上り虹のわくよりや人を頭ろを

予をふとも思ふ人や飽くまも指しちぐも寐をい嬉し

かゝむとあり或を末頭を惡しやもいひを相寐ることを得て

しりふの意ありとあり
 上野の伊加保の沼に植る小水葱はあじと名種求めむ
 ぬそ之より水葱の水草は今云水乃少ひありその葉の細き
 小水葱やひの花紫を以て美しく古に植る食用や
 大意をかく憲しやむやてと言ひ初め置しと植るたる小
 水葱を借る種求め寄やす

伊加保夫よなつしけ思ひとる隠しをなつと忘る為あり
 夫と名り男ありなつしけひ下解を難し集中の難歌あり
 とり或云なつしけをなつしけ繁にの義歌やとるを雖乃
 此あり隠し隠事には忍び違ふ事あり為ありと為ぬの延

ひたふ

大意を伊香保子に思ふ男を吾とあり繁く思へとも男
 をつとありのひたふを訪ひも来ぬその男を忍びく隠事
 甘く忘れぬといふ意

伊加保嶺より雷あつて我方にを故と見せよ依りて
 大意の伊香保嶺より雷鳴るごとく勿れ吾が方に何事も無れど
 七姉の怖る依りて我が密の海に可ありありを程

伊加保風吹く日吹くぬ日吹く我が密の海に可ありありを程
 大意を伊香保山より吹まはる風を吹く日も吹くぬ日も吹く
 せも吾が人せを止む可しとあり

上野ぬ伊加保の宿るる降る雪の行き過を粧ぬ妹が家の宿る
 降る雪を降る雪の俚言の雪を行き過を粧ぬ妹が家の宿る
 大意を妹が家の宿るる心疎く行き過を粧ぬ妹が家の宿る
 伊加保の岨の榛原杖の衣を着て依りしと直つと思へど
 依りしを依りの延あり榛を皮ひく物と漆め又若葉は衣
 子摺り著けし漆むれせ摺衣なり
 大意を榛の葉を衣を着て漆むるれ妹が吾子著き
 依りヨマアその妹が心一向にせしとあり
 伊波保の岨の松限と名君が末まを心よるる
 伊波保とその地様を或は伊何保の誤ある前二首乃

岨の榛原と語氣同じくあり
 大意を伊加保の岨の小松原の外を崖に限り所ある君の
 絶え限を末まを心よるる
 上野ぬ安藤山着所成度延ひしものを何れを延えむ
 安藤山の解を中巻子出でたる葛を延え蔓草せし
 大意を安藤山の裾野の度さが故子着の心乃まに遠と長
 と延ひ互ししめ互の中あり今を如何すとも延え
 せじやたなり
 子持山は紅葉づまを痛むを思ふ河を何れぞ思ふ
 子持山を群馬郡の北部中山峠の東より上白井村に属す即

伊香保の北の正面の小野子山のたけを並びを傳えたる山あり山
 頂々大なる岩の形大岩の小岩を抱くらし持岩
 やいひ山子持明神の社りう若蛙を嫩楓を紅葉つ
 まを紅葉するは春を秋の意なり
 大意をゆく二人寐てゆく寐てねど春より秋まきの久き間や
 ぢも志のゆき吾に寐てらんをみよ汝を如何し思ふぞや
 古今六帖よその句を寝んと
 思ふと妹の心もあやかり

伊香保の古歌

古今長歌 異休の母れはささきとあり世の心は治りは思ふ心とのまは 忠岑
 拾遺 川のわのやいづの沼乃のほを思ふ人せ今一月らん 後人

新後 拾遺 志蘇井あつ川の沼のいさか波をあらん 五月雨の清 順徳院
 拾遺 唐名各のういづの沼水けりうま玉ぬくはやれそひて 定家
 夫木 東路のいねの沼の杜の神のほを思ふ人見ん 頭伸
 同 ちちねがはしよまの沼のりを思ふ人見ん 行意
 同 建保百首 五月雨のういづの沼のあやめ羊を思ふ人見ん 家隆
 同 五月雨のういづの沼のりやあつらんあにねにねを思ふ人見ん 知家
 同 水原のういづの沼のりやあつらんあにねにねを思ふ人見ん 同
 同 水原のういづの沼のりやあつらんあにねにねを思ふ人見ん 同
 同 水原のういづの沼のりやあつらんあにねにねを思ふ人見ん 同
 同 水原のういづの沼のりやあつらんあにねにねを思ふ人見ん 同

明けてらふおのの治をなす所の河をなすやあはる 俊成女
 思ふとて伊香の年を本に相すけりる治をなす人 兵衛侍
 石垣とえらるる治をなす人 加保の治に 五月雨の治 忠定
 妙りなす人 伊香の治をなす人 伊香の治に 涼しき 範宗
 知らぬにわが治をなす人 伊香保風をなす人 伊香の治に 道堅
 わやめいといふ人の治をなす人 伊香の治に 道堅
 昔時かたはるくは伊香の治をなす人 伊香の治に 道堅
 此の治の年をなす人 伊香の治に 道堅
 夫木之末の治をなす人 伊香の治に 道堅
 伊香の治をなす人 伊香の治に 道堅
 夫木之末の治をなす人 伊香の治に 道堅
 伊香の治をなす人 伊香の治に 道堅

伊香保風をなす人 伊香の治に 道堅

夫木之末の治をなす人 伊香の治に 道堅

北國紀行

堯惠法印

上略 越後の府中より越後を略 八月 文明十の末を又旅立つ 略 越後信

濃上野の境三國峠より伊香を越えて伊香を略 重陽の日上毛白

井といふ處より伊香を略 藤原あり 戸部を民部之

旅思の哀憐を施す 略 是より伊香を略 津の温泉より二七日

伊香に入ると 略 又山中を歴て伊香保の出湯より伊香を略 一七日伊香保より

伊香を出湯の上より千巖の道を通りて伊香を略 伊香の上より伊香を略

一方より伊香を略 高き山より伊香を略 伊香の流より伊香を略

ふん伊香保沼といひ... 往跡を... 根霜を...

種し... 伊香保の沼の杜を...

神無月廿日あまりに彼の國府長野... 陣所を至る...

時予... 此の野を秋の霜せり...

野に満てり... 定昌の指南...

つわろ... 旅宿を本陣...

長野修陣... 武蔵へ行き又九月十三日...

戸部亭... 九月盡し... 十一月の末...

宗祇終焉記

釋宗長

宗祇老人... 越後の國... 文龜初の年... 長月朔日...



置まぬ上野國を津より湯に入るを駿河國に罷歸人の
 由男ひまぬぬを以て宗祇老人略し伴ひ侍を略す
 此の略を打捨國を歸るをみえはしとみえびうとて信濃
 路より略廿六日 文龜二年 二月ありやりや津より入るを
 國を伊香保といふ名所の湯の中風の者宗祇を倒す宗
 祇を其方より趣まきとて五月の短夜せしむるは
 湯より東へ去ると五月の短夜せしむるは
 此後宗祇を武蔵花子に至るを病甚しく相摸の箱根の湯本に至るを死す文龜
 二年七月三十日八十二歳あり門人宗長死せ送るを駿州沼津の黄瀬川の二里許
 桃園山空輪寺に葬る宗祇を紀伊の有田郡藤並莊
 の人飯尾氏より幼に律僧とあり連歌を長ず

東路の裏

釋宗長

略 永正六年 八月十日 上野國新田の庄に大澤下總守宿所はて草津
 湯治のまのひあどとて六七日より静喜に又連歌あり
 此の衣のわやりの枕詞に旅の心とそん侍るをみえはしとて
 の心はそこの由は静謐の心とて草津二日路許
 隔て大胡上總介館より略長月四日あり野山を過ぎ
 青柳やりの里りの略此の空を伊香保の山に立寄るを
 替りるを夕日とて思ひえとて

屋敷れとををれし終の夕日一軒

略も河と以て安んず松田加賀守法體とて宗繁此十年餘あり
よの言ひつはけり八九年の先の年宗祇此路を相伴ひて
信濃路より例もあしし此宿所は廿日餘を逗留懇切の
忘を難き事ありと略

宗長を駿河國益頭郡島田驛の鍛工の子あり或云近江の北村の人暮年て駿
州に住かて駿河の守護合川義忠を仕ふ後僧とあり宗祇を連延と學ぶ
此書を駿河より白川の瀬で見んとて旅せり紀
行あり享祿元年三月十六日八十五歳歿す

山吹日記

日下部高秀

箕輪の故城跡西門の跡りり空堀三重櫓臺西南を流し山川廻り
流る内郭の間石二つありと云 矢原村 柏木箕輪の間に龍門寺を業平於臣

のさすらひ住るひし所を以て長野氏をその末葉の 箕輪の
城跡より東の方八町許に椿名大神宮あり石室の上を宮居立
軍に見ゆ式は椿名を以て椿名の方あり神名帳の頭注
る椿名椿名一山と云ゆ 此事誤る前の三神 椿名石神村の畠中
子忠懐忠存の墓りり建武の頃此二人を吉野の御味方頼印を
上巻座主の池の 足利方より斯く戦ひ兩人討死せしは墓せしと傳ふ
変見合をべし 椿名大明神を元湯彦命と云ふ満行將軍をも填安大神と云ふ
元湯彦命と申す御名を大成經と出たる説をいふものあり
子見をねぞ用ひてし満行將軍の名もそそく聞をいふとあり
ふし填安大神と申すぞまづそそくいふとあり 夜うけ

慈悲心に鳥の亭を造りて聞くと、榛名の沼に至りて古の伊香保の沼ありし沼の汀に石を築きて墓の標あり是を伊香保の木部何某やといひける人の此沼より身と沈めたるが墓あり古ま標を水に入て失せしが再作せしむるありといふ此石を古まやうといふ善く見たり明徳の二字あり此二ツの墓事跡誤を中巻とせんし以てそのひのともをいふに沼あり伊香保の間ありし傍より岩垣山といひけるそのかへに池あり座まの他より頼印座まの住みし所やうを岩垣沼と名にし所よりと思へど古歌よりあるも打きおせたるやうにせしめて所の名あるととも思ふ伊香湯前明神と拜み奉りて伊香保の神社ありと云々、水澤の左

船尾山そびえたり傳教大師の開基はを岩を大寺にけし千葉介胤心攻め止むるを今を寺はし、有馬村に甲波宿禰の社あり御旅所の

日下部高秀、字東進、仁良齋と号す、通称を今條貞右衛門寶曆元年歿す、塙保己一を此人と學びしとあり、此山吹日記原本手入らば今上野名跡志の引く所也、抄出す

伊香保の道ゆき

倭文女

上畧上毛野の伊香保より出湯の山をへて母をじ乃其のじ伴ひ給ふれど流生の十日まをむと日寛延三年三月十一日又おれよを雪も消ぬといふをよとて畧をたふ瀬



川下川神流川を武蔵と上野の間に流るる遠方の雪を降るひ
 と見ゆるを信濃の山岳の岳々の存存にあり伊加保領の
 山々々人の暑妙義の山をとりてある暑志の所の山を待たはる
 といひ林間の里とあるをそよの合りにまると榛名の山を以て
 神さびたきまを指さるる人々を崖をたてて崖のよきふと繪
 しも水を見知らぬとゆふありありと水たまりありありと
 何ぐくの岳を霞の煙のふかたに伊加保の沼と川ゆき此より
 少くもいへどもある人も此大神のまに洗つていひくまきあはる
 にはやまをいへんをいへんわらわらにいへんをいへんをいへん
 りに至るまでいへんわらわらにいへんをいへんをいへんをいへん

るよりむぎの二つせういへんをいへんをいへんをいへん
 隠せるも折りしわらわらなる外面の梢にも乃中より櫛の一本
 ちたがらざるをいへんをいへんをいへんをいへんをいへん
 こつとふとわらわらにいへんをいへんをいへんをいへんをいへん
 花の山をいへんをいへんをいへんをいへんをいへんをいへん
 雪をいへんをいへんをいへんをいへんをいへんをいへんをいへん
 佛の聖といへんをいへんをいへんをいへんをいへんをいへんをいへん
 山をいへんをいへんをいへんをいへんをいへんをいへんをいへん
 とこの山をいへんをいへんをいへんをいへんをいへんをいへんをいへん

五月雨風急し物騒がしき心地をなす雷も井ぞくく
 里出でたらぬ思ひうけねど打撃も堪へねどふらつし
 たるも小歌のう人も何れも思ひにやずしりとさるる魂今
 ぞ失せぬるとおへるを踏間ゆりけあをた此透垣のゆき
 けり落ちたる程とりやあしあどき言ふもはくなり暑はけけり
 今も冬よりあえむとて端へ出て見られたゆきこの歳を暮らす
 今もけりやうは雪のまよふを物思ひしるれさきばかりひらつと
 雨さぐりくと鳴り出づるをさやて家の長の信をよめへはぬらふ
 めるにもさかき生きたる心地をさする申の村さぶらわたりをさ
 ほれど名残あふ茶釜をけりておれぬん心地もせぬん今しむ

寒き雪ふれが大きき平るる里よりほくやを枯きたる木の
 左らのゆきぐ長三きららる杖三ツ四ツ打ちとぶたきか暖け火
 けりやと烟もふれが人とさるる間居しるゆかり色の酒を
 浦さるり物よりしむむんがうりまをさうたてあはれかやけり
 頼もき心地もせぬと閑居より此湯の水よを此よりえゆめ
 高根を落つる水の火石といひを岩二ツ車毎のゆきやけり
 かく湯やまをぞいひやけりしむむんがうりまをさうたてあはれ
 つくさるも晴れなきぞ元の雲へ返るやかの標をいと教りれき
 たりりかぬ風吹と白ぬぬ日あつてまてけりぬぬあけり
 けり様う暑からして八日すまちおづそまの家のもの新すけり

此の志を記したるは里子といつてかく習はしなりといふ事ありやう
ふへ給も亭よりしぬぐさのちあをる畧かゝりゆゑなり
かゝるまの爲川と度る下畧

此倭文といふ女子を江戸の弓町に住める某の女を真淵の門より寛延三
年十八歳にして此記と書と後夫持ちしが寶曆二年七月廿歳を死すその
遺文ある此記并り消息文和歌と集めて文布といふ一巻の寫本とあり
傳ふり村田春道が寶曆八年の序りの真淵翁が倭文女の碑文も載せたる
又本文假名文ありと多く漢字と交へ書きかたり

伊香保道の記

山岡明阿彌

上野の國伊香保より出湯にゆくと思ひ立つ畧十二日 寶曆十四年四月 今
日を伊香保より行きていづりぬをきき聞けといと嬉しく曉起して
出立つ此のまぢ 高寄 木曾のちろぢあしど夜日より人の行きかひ

京橋日野油谷
氏伊香保志
衛門ノ女

あげく略 元宿とやらんしあふより便宜よりやゝ細き路より入里めて
申あぞ又田舎なつものから野とゆき山谷城より入るてゆきくし
柏木より里に書書の餉より或人の物をひたれが鷹の卵累糸
たゝとぬいたるもの木の葉より盛るより来りて家よりあは
筈より盛るもの成りてあづし此を里をたて路遠し山も
嶮しあどり略 妙く山路より入るゆき限あり遠き心地
すまの志を伊香保の山を眼の前より見ゆれば行く路を七尺は曲
まら瓊のぬく佩のむしのたゝあふりて似たれど只後方より
歩むが如く行きあづる略 庭よりやく高き登りゆき打願まれ
を仰きえし高き樹よりしつと足底より見あされ向ひより見えし赤城

の山も傍かたわらよりまのすれを實げく遠くもあす々々のまとうりめ、むん左日
 回まわり右みぎより轉ころるを奥深く行きゆきを水澤やうへ所ところより来きはまね
 あらにも觀世音菩薩くわんぜおんがさつ立たしたもう瀧たきのまをこもを十一じゅういちのりり、ついでの
 番ばんよりゆきせまう御寺みでらとぞ御堂みだうもこの段だん宮みやみはにまどまきりく
 しく見ゆ略りやくあふ月つき又山を回まわるを登のぼるより右みぎの方かたを尾崎おしざきあづき遠とほくく
 や見渡みわたきより利根川とねがわを帯おびのぶと見ゆまの度たびを高野たかのの丘かみ谷やまに渡わた
 りと細ちまう千條ちまがらより分わかれたる路みちの縁えりせりおまへたるまゝをその中なかより
 人馬ひとまも小ちう羣ぐんれるを蟻あまとりの蟲むしの熊野詣くまのまよひをやういふ處ところよりはも似にう
 水澤みづといへどひづら水みづはほほそとけ下くだるを又向またむかひの丘かみより上あるを城黒
 澤しづといへど路みちをすぢを白しろくをうらむるがれが此こゝの水みづ無な浮う白澤しろしづふを

こをいへしやとちまのう言ことひもなほ斯ごとくと行いくを路みちの空
 の叢くさむらせかけせらぎ流ながる水音みづね聞きゆ略りやく路みちゆふ人の是こゝを温泉りん乃
 流ながの末すえふを教しよふと嬉うれしくも近ちかづきぬるがれ
 せちの草くさやうを坂路さかぢせ上ありてのらけしその居ゐるを家いへよりたたり
 法ほまね略りやく十二日朝あした日ひ高たかく起おきいで見ゆらむを四方よしかたにまらふ
 める山やまを屏風びんぶをまてたる状さうたうの山懐やまなこより見馴みなれぬ家いへども多おほく作つく
 るはけ多おほくあり湯浴ゆとんとて入いり来きし人ひとと老おいたるも若わかや
 ももところ行いきゆひもあするり物商人ものあしを夜日よひやい入いり来きるつひ但ただ
 しよのまふをいれと略りやく斯ごとくと日ひ敷しきも経ふきをいや徒然あきらたり心
 のゆくりもあふれば打連うちづらまをその山やまに見み廻まわるよりたりの

里の状を度む路を中にやまを相向ひて家と作し物より條
 小路を十餘里二區開たる表裏より作し重石を軒に造り
 月そのまゝの中つひに楹を伏せ出湯を引き上げ右より左に細き竈
 湯浴むる人その槽より浸るる瀧より打たる湯を山の
 尾の長うじ出でたる上より作し引けたまは路の石の板し
 て昇る障り此湯をその上つうこより遣るるれどもや
 水の心ひまに低き就き流きゆくなり略その町のいと上
 なる人登るのふいよなり名より負ふ伊香保の神社立したまふ宮
 居ると物より神えんびたり處の人を湯前大明神と申し奉るる

下ノ二十

略後ひんより光如來立したまふ略見ぬら甘を御前なる
 桃櫻の花ももと合と盛さかり咲きたるづいを飾し略その法師の
 庵より立り入る物問ひあると小田舎人を珍しう物より覺る
 此御神の縁起えんぎと語りと語りと語りと語りと語りと語り
 りいよあれど語り種々の物乃形作らむ略又此たのし人の翁
 慈あまの醫師の才さいをよみ山谷を求め草木石塊を採り
 きて末を略此のころを雨風あまを略夜を語り安んぶ
 と語りたり彼のよ吹けを宣のたまひしと今も思ひ出づる伊
 香保風をこれよと語りと語りと語りと語りと語りと語り
 ともひきてあつ月あつも立ちぬ日數も積たかまを程近うあり

今日明日出立たんとすそあつた人のとそあつた惜しみ又来ん年も
 かまひおどしをまきふふ別まふとあつた惜しむれど此住る
 家の常に凭居し柱の筭のまを今をやく宿離まぬもやいつる
 古言の付けしもいとをあげあまも早月四日午故郷と身の文も
 て迎へる人も来しおどいそ嬉し之今ハやそそのつとまて
 略路を志の住とく家の向ひ谷より細き山路を登る嶮うと
 移れる坂せやわと切通したとつるまをりあれむ左右の山の腹も
 路も皆白土の碎けたるが凝鹽の散り霰の吹き寄せたる状も上
 坂行をぞ足元いと危く多し是を冬の程を以て寒き處に
 皆氷より閉られもるが春にあれど吹く碎け落つるまるとぞいつら

せ過がれが高き廣野を行く山の尾岬遠う長う見やられむ
 赤の住ん里の家どもれ梢のまをり見ゆるが名残惜うて隠る
 まで願のまをり三國の山岸津の山をゆと雪の消残りも覺斑
 子見ゆるが行を盡せざるがたが假初の篤の條屋立てり
 人ともり立ち寄りて替休るもや瘦せたるが箱二人居て
 なるれ物語を背の山を相満の嶽並るが峯いふも嶽を
 にも出湯にりあをて教ふまを風れも疾きぬまを時を今夏
 の半まれまを空の景色を更衣かめりの状も野山の草木
 もまをり青みたるが尚枯れも砂まをり茅薄の高き中を
 行くまをり猪狼まをり人まをり悪くも獣のまをり時を今夏

あど聞くと恐ろしき事いづは珠は行交ふ人さへも無
 るにわびの心細き憂の状をいかにいふにても心
 らしむる余物急が左の方より高き圓き山見ゆるを沼端の富士
 山ぞりとりや實は略その山は富士覺えたり略その麓はみづを
 行くと前も後方も傍も皆山は立ちゆく中にて思はれども
 眼ももろり廣き池のゆの翠なりけり故に藍なるも尚濃と
 黒水をいづ状にゆはぬが伊香保の沼をまぐる水は生か
 生かす藤あどいづものも見ゆ塵なき池の中心清く澄きと
 り底ひも知らぬ遠くをやまぎ健波の向もまき未寄を洗ふ
 岸は渚の礫石のまげ敷も並みまきと伊香保の山はみづをいづ

と向へる状に何の物恐ろしき憂ありまらるる事聞ふ事
 くと供人へ物問はれまきまきわらふ男出で来て言ひ教ふ
 と榛名の御手洗に侍る昔此處領する人を木部の弾正某と
 申しおその守の妻はひら花らんやと見ゆらむ此の池
 の道遙しとるの汀り立ち寄りて吾もこの池せよと
 棲むもの宿世の因ありて假人に見えたるあり今歸
 るぬべき時ありぬその事歸りて傳へしにゆつち
 や落しゆぬ御達役者どもゆわて惑ひくとも如何にせし
 とゆつちまきせんすもゆきまきゆきゆき波風起りて八
 尋許の大蛇やふもゆきまきゆきまきゆきまきゆきまきゆきまき

伊香保志 赤城紀行抄出 高山彦九郎

此池の主なるては... 誤ちももる可あはせ必雲起り波風荒まき火雨も降り降るは
聞たりとを雲がくやくくしく恐ろしくてそのまじの塚をたは
以てけはくはくしく見もやぶ山路せやまつ行と細谷川
の石橋踏みまらて尚行けど程も榛名の宮ましたまふたの
空を此面彼面を石のみ峙り臂折るたるまき段階を登りそ
えれば宮楹太しきまき干木たのしきまき瑞垣がりく祝司
が打ち鳴らす鼓も音のりく乙女子の掃い振る袖もゆきよりり
おのりくくく神がうやうやうあまきらびりたるまきまきにきて
る音籠石やうやうを塔の層た状したるまき實に経るん年の

數りやよみまはし尚此外にも吳服石山伏石地藏が獄弥陀が獄
まどりよも皆その形の似たれが此名負ひたるまき斯書を数ふ
るにま目もあはしく危し御垣の傍り二本の杉とのまき
その下せ山川流る略鞍掛石を向ひの山乃峽なり名を聞にく
くはどその状をい怪し文珠の浄土まき獅子の行まき橋の
状にも似やしあんやうく山と降るまき行けまき神まき並み立
まき略松枝の驛路まきまき略
本文婦人のまきまき禮子記したるまき假名のみ文まき今讀み易まきん
為り漢字まき交ふ明阿弥姓を伴名まき俣明とまき幕府の道坊まき真淵の
門人
あり

赤城紀行抄出

高山彦九郎

伊香保

伊香保

安永二癸巳年十一月十八日大島甚左衛門所へ行り大島氏の氏族と書留り旅宿へ歸り温泉よ入

伊香保の神社へ禮服し冬詣す町の南へ上り町屋と云く東

西より前より寺あり是を別當より伊香保湯泉寺なり此社の

上野國十二社の中にも伊香保の神社赤城神社の宮の貫前の神

社を大三座といひ外を榛名山を小九座といひ伊香保の神社今を

正一位湯前大明神なり四十年計以前此号より神社寺僧乃守り

なるすらすらに神号を改むることありんが湯前の神

号の時も吉田より湯前明神別社に祀るべき由仰りし事

大三社の其一也湯前の神に依り奉るを愚らむ故とぞ神拜畢

下ノ三十四

其後藥師堂あり回りと南向なり是を別當湯泉山醫王寺

なり神社に社領も依り中卷伊香保神社の處并り三神の辨の慶見合せし

登榛名山記天明二年

平澤元愷

毛人屢稱榛山之勝今茲游四萬便道以四月二十日登略

山在群馬郡距松枝驛三十餘里遙秀于百里外其高可知

路唯阻溼夙出驛舍越風斷嶺晡時乃抵其麓略已抵山腹

略唯有松杉夾道百尺千章于雲霄是可怡悅已復前二三

里突兀巨石嶮立路傍高出於松杉之上豈麻中之蓬者石

耶抑松杉欲與石抗耶横者架雲臥谿如屋梁如複道如尺

蠖之將信愈登愈出所謂如巨象如狡獬如虎踞鳳翔腐語

伊香保

伊香保

他太牢謂我
既探抄義金
洞之奇也

未足狀也。然我曹已飽太牢。亦不易饗耳。神祠在巨石之間。磴道樓門。莊嚴殆歷廟貌。香火之盛。遂使山如此俗哉。豈人之佞神歟。將神之媚人耶。若不媚。何容佞者。求福之不回。豈有所不臻哉。問之祝司。乃曰。祀彥友尊。或曰美滿持尊。今祠稱滿行。其義未之詳也。傳說滿行事跡。陋滋甚。近時管轄東叡山云。神歟鬼歟。將佛陀歟。余卒不能辨。則不敢拜而下。若夫大黑岩。葛篋岩。龜甲岩。佛面岩。俯臨岩等。土人艷稱姑置。略維石巖々。奇則奇矣。漫遊文章抄出

游船尾山伊香保記

天明五年

同

今茲乙巳夏。余再游上毛。而主澁川村民田子心家。略游船

尾山。山一名富饒。距澀川村。半日程。與伊香保相連。略戲作其文曰。如是我聞。富饒山有飛泉。其高四萬由旬。登此觀望。世界悉見。風景微妙。不可思議。我從緣起。此日同遊。與大達尊者。大察沙彌。優婆塞等四眾俱。欲重宣此事。而作其記。先抵水澤。憩觀音堂。經行林中。遂至瀑布。一心除亂。咸皆歡喜。水聲深妙。令人樂聞。乃與四眾。食飯飲水。如是施與。甘露醞。身意益力。隨喜無量。勇猛精進。遂登山頂。慇懃賞嘆。忽發一意。為四眾故。游伊香保。山路甚艱。伊香保地。昨年九月。災火蔓延。盡為火宅。熱湯涌出。如阿鼻獄。爾時我等。為病惱故。沐浴此湯。洗諸欲染。患難悉除。快樂潔身。饑渴頓來。周悻熱

悶。搏飯殘餘。相集食噉。呵々大笑。走出火宅。稚少遊戲。歡娛樂著。雖無寶車。隨其所欲。衆意非一。自在無礙。重經空野。日沒歸家。是時五月。十有三日。尊者為誰。良珊寺僧。優婆塞何。田子心等。我則鬼道山人也。漫遊丈草抄出

平澤元愷稱五助。寬政三年歿。

仁泉亭記

吉田芝溪

也。萬葉之咏。既稱伊香保。則其所從來最尚矣。雖文獻不復徵矣。宅傳口碑。累世絲。戶不更系。田不更主。僅々數民居住湯源之地。千有餘歲。宗祇遊浴之日。以仁泉名此亭者。豈偶然哉。蓋宗祇親試湯泉有奇効。又親見發源之地及居民。皆悉為千明氏之有。而亭名遂以仁者。其形勢自使然也。其後元龜天心之際。郡屬武田氏。當是之時。千明氏嗣幼而母老。餘民相謀。告於有司。移村於今地。營業於溫泉。傳言天心四年。武田侯賜分地於七民。是也。七民乃木暮氏。岸氏。大島氏。後開氏。望月氏。島田氏。千明氏也。又分為十四戶。各規引溫泉。官又定規法。使千明氏世為規心。又以發源之地為其



伊香保
湯源
山隈
孫々
奇村
予
又知
吉田
馬郡
更衣日記
多保子
下ノ三十七

所持也。於乎宗祇以泉德名此亭。餘澤覃闔村。以地則幽僻
山隈。以耕則瘠土獸害。其民則僅々十四戶。然而千數百歲。
孫々相續。永與溫泉相終始者。亦泉德之餘慶。而吾毛中之
奇村哉。近來村中數罹災。古書舊區。悉烏有。於是乎。主人托
予以記。予向視宗祇之所書及先年宅址。今猶存于湯源。又
又知閱閱之所由傳。遂取筆應其需爾。享和三年三月

吉田芝溪、名友直、字子心、上毛群
馬郡澁川驛人、墓在澁川新田

更衣日記

多保子

女政のあやせまの申の卯月朔の日上野の國大間とある古里へ行
くと由りしが伊香保の温泉にゆきしに孫子らよりを言ひしを

出でたり。その日を良人の大城へまゐり登り給ふやそ後若ふど夫へ
ねやあやせまを朝とくを門せしむる略やうり午の刻もどる頃乗
物いそいで立ちいでぬ略三日より大間へ申すを後著きぬ略
まてよしの春を榛名山をりて大御神の御戸開にせ給ふて人
む伊香保の湯浴みながら詣でも甘みかしと人とそののり
くつり略同胞ありあふ人々案由なりて行と心を事やま定め
ぬ略十二日伊香保へとて立ちいで略澁川の宿あり略この澁川
成立ちを一里のありあふとせしむる往來の人々逢ふは雨
を以て降るありて候しきふゆりく高き山を向ひてまゐる
と思へどいつしりその山も後よりありて又それありあふゆる山

伊香保
湯源
山隈
孫々
奇村
予
又知
吉田
馬郡
更衣日記
多保子
下ノ三十七

のひせゆく略すは経よく伊香保の里に入るふその入らぬ
 よる家屋のるよしなり雨の側より大なる土花あはれ立ち並び
 たらんえや木暮金をまきりか神子宿借まぬ六の里に湯宿と
 以て家十二なりとやそが中にも六の金をまきりて豊よら
 家ありと聞くとりの里よりそを家屋の数に中なりありあまら
 たり落ちつきた疾く湯にみりそを急ぎ行かざらたす
 見たり湯壺三月よりたその壺の大を置てそをたす
 えやいの中瀧を落したるそなりその落つる瀧の音まだ
 聞きありとておきほしう覚や昨日より雨のゆゑ名湯もぬ
 せり略すそ入るそえんとやそら入るそ思ひこづらひしうそ湯も

屋まののほそ肩を瀧をたなをたなみそす略食事との
 かけを思ひだすべし器を何よりそら清らうなり町も家々乃そ
 むれくしう賑はし晝過ぎし夜はそありお湯をたすそ
 三饅頭ひと折敷と茶のそふ出たそ始を宿にまらうとに
 もそあはれそらしと聞ゆ部屋にへ女子ゆふとそをそ
 雨間もそそとら見渡せば山と山と重なりつひたたり霧はそ
 めんもそ又六の家乃前裁を見たり梨の花盛りにそかへ
 桃のそ咲き亂またり江戸をそ標もたそそ茶をそそ
 かくつらもそし卯月十日あり三日あり綿入まら衣もそ
 有着そそそあり伊香保風ふうねやうにと誰れそ

二岳の蒸湯
伊香保の湯
と脈異なり

伊香保志

天保八年

より二の岳とて高き山ふたつありその下の湯も出湯なりといふ事
より伊香保の湯元ありまゝ相馬が岳なりといふ高き山ふと見
えそ程もより下路へ恐はしむ處なりとて地獄谷といふそ
下をぬれ湯の沸き出づる處へ落つとて身毛の毛いぢりたる
り恐はしとて窺ひもえびたを急ぎて伊香保へ着て暫休
らひて程よくて出で流川より宿多

下略廿二日
江戸へ歸り

この記と余が祖母が書かれしより祖母を上野の國山田郡大間々の里吉田
氏が女に先考磐翁の後母ありとの記と其の母君乃田忌なりとて
故郷へ歸省しりし時の事なり時年五十七後慈光尼と稱し天保八年丁酉五
月十六日身まかり年七十おはしまし本文も假名書あり今多く漢字加へたり

伊香保志下卷 大尾

下ノ四十一止

伊香保ハ系河治ト産

この系河治ハ系河の治と出づる温泉とて系河の神は此也
伊香保とて系河の治と出づる温泉とて系河の神は此也
系河の治とて系河の治と出づる温泉とて系河の神は此也
守門ハ海雲が岳とて系河の治と出づる温泉とて系河の神は此也
神は此也
男は此也
その川も此也
ゆ乳山も此也
わたり此也
よ此也

明治十四年四月三日版權免許
同十五年六月一日發兌

編輯人

大槻文彦

本居宣長
全戶町廿二卷地

出版人

竹中邦香

同日本橋區
兜町四卷地

伊香

千明三郎

島田平八郎

保

岸六左衛門

島田次郎三郎

賣捌

岸權三郎

木暮武太夫

所

永井喜八郎

木暮金太夫

大島甚左衛門

木暮八郎

